

ミライの声を  
聞いてきました



芦屋市出身で、国連本部でもスピーチを行うなど、SDGsの第一線でご活躍されている川廷昌弘さん。コロナウイルス感染症をはじめとする地球規模での環境変化や社会問題が起きている中、持続可能な社会の構築や、未来のヒントとなる考え方についてお話をいただきました。

**SDGsはミライをつくる道具**

SDGsは、国連において1972年から地球の未来に関して「環境保全」「社会開発」「防災減災」「ビジネス」「教育」などの観点から持続可能な人間社会について議論され、2015年の国連サミットで全人類の目標として採択されたものです。しかし、これは単に勉強して知識をつけたり、暗記したりするだけでいいものではないと思っています。SDGsのロゴであるカラーホイールや、17の目標のカラフルなアイコンは分かりやすいコミュニケーション・ツールとなっていて、「みんなで未来をつくっていくんだ」という一人ひとりの主体性をつなぎ合わせるものが期待されている内容になっています。

「私は芦屋に住みながら何ができるか」「私は芦屋の子どもたちの未来のために何ができるか」ということを考えることが大切で、そういう意味でSDGsは一人ひとりにとっての未来への羅針盤であり未来をつくる道具だと言えると思っています。

**過去から学んで考えるミライ**

芦屋市には、全国で唯一の芦屋市にだけ適用される「芦屋国際文化住宅都市建設法」がありますが、この法律を作った過去の先人たちの考え方が、これからの未来を考える際にとっても参考になると思います。

当初、この法律を作るにあたって「観光」の要素を取り入れようという考えもあつたようですが、先人たちは議論の中で、「観光」の文言を除き

# SDGs みんなで作る ASHIYA のミライ

博報堂DYホールディングスグループ  
広報・IR室CSRグループ推進担当部長  
**川廷昌弘**

SDGs: Sustainable Development Goals の略。2015年9月の国連サミットで採択された持続可能な開発目標として、2030年までに目指す17の目標と169のターゲットが定められています。

ました。これは、当時、芦屋のまちが持つ資源に観光の要素がないことを認識した上で、資源としてないものを無理に他から持ってきたりして取り入れようとはせず、温暖な気候や、大阪や神戸との位置関係や、身近な自然など、芦屋に元来ある資源や、住まう人も国籍を問わず外国人の定住まで考えた住み続けられるまちづくりを行っていくという発想でした。いつの時代でも色褪せることのない住宅都市のあるべき姿を目指した法律で、まさに今こそ必要なサステナブルな考え方のもとでつくられたものだったと感じます。

さらにすごいなと思うのは、法律制定のため市民参画型で住民投票を行ったことです。このような考えやプロセスはSDGsの理念と一致するところが大きいにあると感じます。昔は良かったという話をしているわ

けではなく、終戦直後に志高く未来を考えた人が芦屋には存在したことがすごいと思いますし誇らしいと思います。これからの芦屋のためにルールづくりやまちづくりをしていくために、このような過去であれば学ぶことはきつと多いでしょう。自分たちの生き方のヒントにもなるのではないのでしょうか。

また、芦屋は日本初の女性市長が誕生したまちでもあります。女性活躍の一つの功績をつくった訳ですが、そんなまちだからこそ単に女性の登用率を上げるだけではなくSDGsの大切な考え方である、誰一人取り残さない、まちに向けた制度や仕組みを率先してつくっていくことが大切ですね。そういった取組を大いに期待したいし、できることならお手伝いしたいです。

## みんなが主役のまちづくり

2020年は新型コロナウイルスの影響でリモートワークなどができる環境整備がとて進みました。これからの働き方は大きく変わるでしょう。何より自分たちが住む地域との繋がりを強く意識することになったと思います。そして芦屋にいても東京の仕事ができるかもしれない。選択肢はとて広がっているとあります。このような時代の中で、子育てする世代が芦屋に住んで子どもを育てたいと思えるようなまちをつくるには、住民がまちづくりに参画し、魅力を高めることも欠かせないと思います。

先人たちが法律まで作って努力してくれた芦屋の景観だってそうですね。誰かが景観を作ってくれている訳ではない。市役所と市民と一緒に

なって、緑豊かな家やマンション、そして街路樹などを植えたり守ったりするから芦屋の景観が成り立っている訳ですよ。つまり市民一人ひとりがまちづくりに参加している。市役所任せ、誰か任せではなく、住民が主体となるような風通しの良さを市役所と一緒に構築するなど、それぞれの役割分担を理解し合うことによって、人の表情もまちの表情ももつと豊かになっていくと思っています。SDGsを推進する国連はそういった方法を作りだすことを期待しています。

## 2040年に向けて共有する材料

僕は市制50周年を記念して刊行された写真集を今も持っています。ときどき眺めては少年時代の芦屋から安らぎを感じることが出来ます。こ

の写真集は、過去を振り返り未来を展望する大切な材料だと思っています。80周年の節目でも、このような芦屋の本質について考えてもらえるような材料を作り市民と共有することが大切だと思います。これまでは高度経済成長の勢いで芦屋も開発されていきました。これからは、芦屋文化が花開き芦屋市が誕生した80年前の魅力を、2020年6月号の「広報あしや」でモノクロの写真カラー写真で伝えたいように、芦屋の本質を身近に実感できる方法を考え、他の地域では得られない芦屋ならではの暮らしというゴールを、市民と市役所が役割分担をして一緒に作り出していく。そんな信頼関係を資本に成長できるような材料を提供することが、これからのSDGs時代らしい発展を創り出す原動力になるように思います。そして芦屋市が

100周年を迎えるころ、80周年のときにもらった材料から得た発想で、「自分も主体的に動くことができてこんなことやあんなことができた。今もこんな想いを大切に持っている。」など自分ごととして、今、芦屋で学んでいる子ども達が喜べるような100周年、2040年になっているといいですね。そのためには今の大人たちが準備をしなければならぬですよ。それが今回の市制80周年に発信すべき材料ではないかと思えます。このようにあるべきゴールから発想するバックキャストینگで物事を考えるためには、良質なインプットがなければ良質なアウトプットができません。良質なインプットをすることが2040年に向けて重要ですね。



### 川廷 昌弘 (かわてい まさひろ)

芦屋市生まれ。博報堂 DY ホールディングスグループ広報・IR 室 CSR グループ推進担当部長として SDGs を推進。神奈川県顧問 (SDGs 推進担当)、グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン (GCNJ) の SDGs タスクフォース・リーダーなど委嘱多数。著書「ミライをつくる道具わたしたちの SDGs」(ナツメ社)から出版。公益社団法人日本写真家協会会員の写真家としても活動し写真集「一年後の桜」(蒼穹舎)「芦屋桜」(ブックエンド)など出版。

### 芦屋を語る事が楽しい

僕の肌に染み込んだ芦屋は、何でもあ  
るけど何も無い。山も川も海もあ  
る。でもダイナミックな山はないし、  
美しい海や常に水が流れる大河もな  
い。自然を満喫できるかというに適  
切な言い方ではないかもしれませ  
んが、箱庭的な感じですよ。だけ  
ど中学生のときの経験ですが、友達  
だけで芦屋の山でキャンプをしたこ  
とがあります。映画「スタンド・バイ  
ミー」のようなことができるん  
ですよ。家から歩いて1時間ぐらいの  
ところで、明日の朝ごはんのウイ  
ナーが腐らないように川の水で冷や  
してテントで寝て朝起きてみたら、  
野良犬に食べられて袋だけが川に浮  
かんでいた光景を見て笑いながら途  
方に暮れてしまいました。ささやか

な自然の中での学びですよ。でも  
ワイルドな自然はそこにはない。け  
れど日常では得られない学びがあっ  
た。やはり友達と芦屋の浜で釣りを  
したり、一通りの経験はできたよう  
に思います。芦屋川は大雨が降ると  
水かさが増して、晴天が続くと干上  
がりますよね。すると、国道43号の  
下にあるコンクリートの段差で大量  
のオイカワが死んでいました。子ど  
もの頃にそういうことを見て、自然  
のはかなさや死に対する切なさ、何  
とも言えない気持ちを日常で感じま  
した。いまならイノシシも気になり  
ますね。芦屋らしい自然界と都市生  
活の同居の中で、子どもごころに刻  
むものがあり、それが僕の場合は人  
間形成に大きく影響していたんだら  
うなあと思います。

声を得た画家の吉原治良さんは、企  
業経営者として日常を過ごしながら  
芦屋で美術活動をされていました。  
彼の元が集まった芸術家たちが芦屋  
の空気感のなかで育んだGUTAI  
美術は世界に強くアピールすること  
ができました。写真家のハナヤ勘兵  
衛さんや中山岩太さんを中心に活動  
した芦屋カメラクラブも、日本で最  
も先鋭的な表現者の集団として成長  
し、その頃の世界の最先端の表現と  
言われていたドイツの新興写真に対  
抗する気概がありました。このよう  
に、先入観にとらわれない新しい自  
己表現に伸びやかに挑戦していたこ  
とを思うと、芦屋に暮らす人々の営  
みがまちの空気感を作るわけです  
から、どんな芦屋だったのだろうと、  
その頃にタイムスリップしてみたい  
と思いますよね。このように僕は、  
今は芦屋から離れて暮らしているが

ら余計に「故郷の芦屋を語れるのが  
幸せ」だと実感しますが、こういう  
ことがとても大事だと思っていま  
す。SDGsは何か大きなことをや  
ろうと言っているのではなく、誰一  
人取り残さず、多様性を認め合い、  
一人ひとりが自分の持っている力を  
発揮して、自分のまちで幸せに暮ら  
すことが本当の目的なのです。芦屋  
はいつの時代でも、住んでいる一人  
ひとりにとってワクワクするまちで  
あってほしいと思います。やはり僕  
は、芦屋を語ることがとっても好き  
だし楽しいし、幸せだなあと思いま  
す。

